

た。このように、13の植民地はそれぞれが独自の方式で統治を進め、産業を発展させていったのであり、その独立性は非常に高かった。

18世紀には各植民地が経済成長をとげ、富裕な商人、大地主・プランターから成る有力な上層階級の台頭をもたらした。政治指導も上層階級の紳士(ジェントリー)層がおこなっていた。イギリス本国の植民地政策に反対して始まった革命においても上層階級出身者が指導したが、アテネの民衆と同様に民衆が自ら戦うことにより政治意識を高め、植民地側は人民を主権者とする共和制原理を掲げることにより民主主義的傾向を強めていった。植民地では、独立前から植民地議会が設置されていたが、革命を契機に選挙資格の緩和などが邦(州)により実現されていった。革命を推進した上層階級の指導者の中には「民主主義のゆきすぎ」を抑制する必要があるという意識が高まり、それが合衆国憲法制定の動機の一つとなった。1787年にフィラデルフィアで開かれた憲法制定会議に集まってきた代表的政治家55人の大部分は、中央政府の権限を強化すること、中央政府を立法・行政・司法の三部門に分けるべきこと、民主主義のゆきすぎを抑制すべきことについて大体意見が一致していた。合衆国憲法は、フィラデルフィア憲法制定会議で起草され、各州の憲法会議での審議を経て、1788年に9州の承認を得て成立した。合衆国憲法では中央政府に課税権・通商規制権・外交権・軍の編成・統帥権、通貨発行権が委託され、州の権限にも様々な制限が加えられた。しかし、制限を加えられたとは言え、各州の権限は強力であり、そのことは「権利章典」と呼ばれる1791年の憲法修正条項にも明記されている。⁽⁴⁾

新生の連邦政府では連邦派=フェデラリスト(政治的経済的統一と安定の確保)と反連邦派=アンティフェデラリスト(地方分権派)の厳しい対立が続いた。こうした対立は、1800年の大統領選挙で州権を重視するジェファソンが当選し、議会でもジェファソン派(レパブリカン党)が多数を占めたことにより、反連邦派(地方分権派)が大きく躍進することとなった。その後、レパブリカン党が大統領のポストを独占したが、レパブリカン党の中では分裂がおこった。合衆国政府の指導を重視するアダムス派とより州権を重視するジャクソン派が対立し1828年の大統領選挙でジャクソンが当選、1832年に再選されると、ジャクソンを支持する人々は民主党とよばれるようになった。ジャクソンは、従来の政治指導者達が上層階級出身であったのに対し、孤児出身であることが強調され、民衆の「代表者」であることが強調されたのである。この時期、19世紀はじめに東部各州で選挙制度改革が実現し、財産資格が廃止されていった。また、西部に新しく組織された州では財産資格を設けた州はなかった。大統領選挙人も従来は州議会で選んでいたが、1828年までに2州を除いて、一般選挙人が党派別に分かれている選挙人候補者のグループを選択するようになっていた。ジャクソニアン・デモクラシーと呼ばれるジャクソン大統領の政治は平等化と民主化、さらには地方分権が進展した時期といえることができる。正に、このときにトクヴィルはアメリカに渡ったのであり、トクヴィルが目にしたアメリカの民主政治とはジャクソニアン・デモクラシーそのものであったのである。

憲法の制定とその後の集権派と分権派の対立は国家としてのアメリカの根幹を規定する過程であったというべきであろう。二つの大戦をへて、連邦政府の権限が強化されたことは間違いのない事実だとしても、根幹としての地方自治もなお健在である。アメリカは様々な意味において「多元国家」である。自治政府の存在性とそこに生きる市民の政治参加は政治の上での多元性を表すものと言えるであろう。

(2) 州・市・郡・町

(ア) 州(State)

州(State)は、正に独立国家であって、大幅な自己統治が承認されている。一般的には、州は交通制度、財産・産業・ビジネス・公共施設に関する規制、刑法、労働条件などについて独自に決定する権限をもっている。健康・教育・社会福祉・輸送・住宅建設・都市開